

全国大学国語教育学会 H30 年春（大阪）公開講座の趣旨説明

「学校で取り組む国語科授業研究の展開② 学校・教育委員会・大学など異なる立場からのかかわりを活かして」

校内での授業研究は、日本の学校が広く高水準の授業を実現している秘訣とされ、国際的な注目を集めています。けれども一方では、校内での授業研究をめぐっては、形式化や形骸化の問題が指摘され、授業者にとっても参加者にとってもモチベーションがあがらないものになってしまっている場合も少なくありません。これは、教師の指導技術や教材解釈のみに焦点が当たったり、授業者と他の教師・外部講師らとが「指導される－指導する」といった非対称の関係になったりといった従来の授業研究のあり方の限界が現れてきているのだともいえます。

他方、こうした状況を打破するための試みもさまざまな角度から行われてきました。ここでは、学校の研究主任、教育委員会の指導主事、大学の研究者といった異なる立場の参加者が、基本となる考え方を共有しながらも、それぞれが固有の役割を果たしていくことが必要になります。学校の研究主任だからできること、教育委員会の指導主事だからできることといったものがあり、それぞれの特性を発揮することで、国語科をはじめとした、校内での授業研究の充実に寄与するわけです。

本講座では、そのようにさまざまな立場から校内授業研究の充実に貢献を実践的・研究的に模索してきた3名が、事例をもとに話題提供を行います。

まず、公立小学校で研究主任として校内授業研究を率いた経験が豊富な大杉稔が、教師にとって負担感を減らしつつ着実な手応えが感じられる授業研究をいかに実現するか、「カリキュラムマネジメント」の視点にも触れながら提案します。次に、自ら指導主事として現場の校内授業研究に関わりながら大学院でも指導主事のあり方についての研究を進める本間隆司が、教育行政に身を置きながらも元授業者でもある立場を活かした関わり方について提案します。さらに、教育方法学・教師教育学を専門とする大学の研究者である渡辺貴裕が、自らの学校現場との関わりをもとに、教師集団の創造性や学び手としての感覚を刺激し授業についての探究を促していくような関わり方について提案します。なお、内容は今後の調整により一部変更の可能性があります。

報告者：大杉 稔（大阪樟蔭女子大学）

本間 隆司（神奈川県教育委員会／横浜国立大学大学院）

渡辺 貴裕（東京学芸大学）

コメンテーター：石田喜美（横浜国立大学）

コーディネーター：渡辺 貴裕（東京学芸大学）